様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６３６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ００３３２

研究課題名（和文）中国5世紀における文学観の変化とその発展、及びそれに対する仏教思想の影響

研究課題名（英文）Changes and Developments in Literary Views in the 5th Century in China and the Influence of Buddhist Thought on Them

研究代表者
佐竹　保子（SATAKE, yasuko）

大東文化大学・外国語学部・特任教授

研究者番号：２０１７０７１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：1. 中国5世紀の謝霊運を代表とする山水詩について、それが当時の仏教哲学のいかなる部分に起因したかを、謝霊運と交流のあった慧遠・その弟子の宗炳・竺道生の文章、および竺道生・仏馱跋陀羅・鳩摩羅什の漢訳仏典を参照することにより、具体的に明らかにした。また4世紀の玄言詩と比較し、玄言詩の中でも唯一仏僧の支遁の詩のみが謝詩と共通性を持つことを指摘した。2. 上記1を、古典中国における「詩言志」「詩縁情」からの文学観の変化という脈絡の上に位置づけ、併せて日本におけるその波及の実態を考察した。3. 謝氏一族の後輩である謝ﾁｮｳの文学について謝霊運との連続と非連続を考察し、非連続の部分に唐詩との近接点を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
1970～80年代、小川環樹氏は謝霊運詩に仏教的「ビジョン」を、衣川賢次氏は「宗教的体験」を読み取り、志村良治氏は慧遠・宗炳の文章を仔細に検討して、彼らの発想との同質性を浮き彫りにした。本研究は志村氏の方法の拡充を試み、当時の仏教哲学との関連をより具体的に探り、また文学観の変化という視点を導入して、謝霊運山水詩に新たな意味を付与し、さらにその文学観の日本への波及を考察した。
山水詠の背後には、輪廻を生む情を否定的にとらえ、その滅失あるいは浄化を願う般若学の思惟が存する。これは近代の人間中心主義から遠いため文学研究では注目されなかったが、本研究は人間中心主義一辺倒を相対化し反省する視点を提示した。

研究成果の概要（英文）：1. The 5th-century Chinese poetry represented by Xie Lingyun was specifically clarified by referring to the writings of Hui Yuan, his disciple Zong Bing, and Zhu Daosheng, who had exchanges with Xie Lingyun, as well as Chinese translations of Buddhist texts by Zhu Daosheng, Buddhabhadra, and Kumarajiva. I also compared it with Xuanyan poetry of the 4th century, and pointed out that only the poem of the Buddhist monk Zhi Dun among the Xuanyan poems has something in common with Xie's poem. 2. The above 1 is positioned in the context of the change in the view of literature from "Poetry is an expression of ambition" and "Poetry arises from affections" in classical China, and the actual situation of its spread in Japan is also examined. 3. Regarding the literature of Xie Tiao, a junior member of the Xie clan, I examined the continuity and discontinuity with Xie Lingyun, and pointed out the close connection with Tang poetry in the discontinuous part.

研究分野：中国文学

キーワード：中国文学　中国思想　仏教哲学　文学観　詩の注釈　六朝時代

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

詩歌がいかなるものであるかについて、中国には紀元前の『毛詩』大序以来、「詩は志を言う」（詩言詩）という牢固とした観念があった。以後もこれを襲い、たとえば陸機（261-303）の「文の賦」には「詩は情に縁りて綺靡」（詩縁情而綺靡）という。詩歌は人の「志」「情」に縁りそれをうたうものとの観念は日本にも流入し、『古今集』真名序や同仮名序に見られる。この観念はヨーロッパ 18 世紀のロマン主義にも通じていたため、近代に至っても命脈を保っている。

他方、劉勰（466 頃-532）『文心雕竜』明詩篇に「宋初の文詠、体に因革有り、……山水方（まさ）に滋し」とあるように、中国 5 世紀には、「山水」を中核に詠じる謝霊運（385-433）の詩歌が盛行した。ただ謝霊運の山水詩は、山水詠の前後が嘆きや説理で占められており、いわば統語失調症的な面持ちを呈していた。

そのため、それは、彼の山水詩が「未熟」であったからだとか、また 1960 年代には、謝詩は景を「客観的」に描きそれゆえ前後の叙情・説理と分裂している、との説がなされた。だが「未熟」の一語で片付けるのは安易な文学進化論に基づいていようし、また、「客観的」とはそもそも何か、詩歌が外界を「ありのまま」「客観的」に描出するなど認識論的にあり得るのか、さらになぜ謝霊運にのみそれ以前の詩歌群と異なる「客観的」に見える詩句が可能だったのか、などについては、納得のいく説明が施されたことがなかった。

一方、歴史学・思想史学・語学等の分野では、謝霊運が江南仏教の大檀越で、仏教学に造詣が深く、インド音韻学にも精通していたことが、早くから明らかにされていた。これらを背景に、1970 年代から 80 年代にかけて、小川環樹氏は謝霊運詩句に仏教的「ビジョン」を、衣川賢次氏はそこに「宗教的体験」を見いだし、志村良治氏は、謝霊運が交流していた仏僧の慧遠や慧遠の弟子の宗炳の文章を仔細に検討することで、彼らの発想との同質性を、具体的に浮かび上がらせた。

報告者は志村の方法の拡充を試み、2007 年から 2020 年までに謝霊運について 15 本の論文を発表してきたが、その中で、謝霊運の山水詠は、自らの「情」の滅失を願って生み出されたものではないか、との着想を得た。当時の仏教哲学において、「情」は決して肯定すべきものではなく、その滅失が輪廻からの解脱を導くのであり、次善として、「情」を滅失できない、すなわち輪廻から脱しえない場合でも、「情」の浄化がよりよい転生を可能にする、と考えられていた。こうした思惟は、「情」を自明として肯定する近代の人間中心主義（humanism、homocentrism）からは発想しがたく、それゆえ文学研究においても閑却されてきたが、しかし 5 世紀に、当時最先端の仏教哲学を身につけていた知識人たちには、なんの不思議もない考え方だったはずだ。

「情」の滅失願望が根底にあるから、5 世紀の山水詩句は一見「客観的」にみえる。しかし滅失は果たされないと自覚せざるをえないから、山水詩句の前後に嘆きや説理の強弁が噴出する。

ここで冒頭に述べた古典中国の文学観に戻れば、紀元前以後、詩歌は「志」「情」から生まれるとされてきたが、しかし 5 世紀に、「志」「情」は肯定すべきではなく、最善にはその滅失、次善としてはその浄化が目指されるものとなり、山水詠はその契機として位置づけられる。するとここに、当時の仏教哲学を梃子とした、文学観の変化が現出することとなる。貴族知識層に対する仏教の大幅な浸透が、儒学（『毛詩』大序）に源流する伝統的文学観のほかに、それと対立し、それを相対化する新たな文学観を生み出した、といってもよい。いわば、従来単線的であった文学観が、複線化するのである。

5 世紀に後出する文学観は、以後の中国古典文学と芸術に影響を及ぼすのみならず、日本にも流入し、和歌や俳句の一部において、特異な成就を遂げると推測される。

だが中国 5 世紀の詩歌の変化については、つとに 5 世紀末に劉勰によって指摘されていたにもかかわらず、それを導き出した仏教との関わり、すなわち仏教哲学のいかなる部分に因りいかに変化したのかは、具体的に説き明かされてこなかったし、さらにはそれを、古典中国における文学観の変遷に脈絡づけた説は、管見のかぎり見たことがなかった。

２．研究の目的

上記１．の「背景」に基づき、以下の 3 点が目的となる。

① 中国 5 世紀にあらわれた、謝霊運を代表とする山水詩について、それが当時の仏教哲学のいかなる部分に起因しどのように生じたかを、具体的に明らかにする。

② ①を、古典中国における文学観の変遷という脈絡の上に位置づけ、併せてその波及の実態を、ある程度明らかにする。

③ ②の波及において、直近には、謝氏一族の後輩である謝朓の文学を閑却することはできず、謝朓の文学について謝霊運との連続と非連続を考察する。

３．研究の方法

上記２．の「目的」の①を遂行するには、漠然とした「仏教思想」ではなく、当時一世を風靡した般若学と、謝霊運がその改訳に参加した『涅槃経』を、理解しなければならない。そのため、当時の般若経典および涅槃経典、さらには謝霊運と交流のあった仏教者たちの論著を読んで理

解を深める。理解のために必要な過去や現在の諸論文については、研究分担者である齋藤智寛氏の示教を仰ぎつつ、読み進める。

また、上記２．の「目的」の②と③を遂行するには、当時の中国の詩歌作品と、さらに１．の「背景」にも記したように5世紀の文学観が波及したと思しい日本の詩歌作品を、精読する必要がある。とくに謝霊運と謝朓の作品には重点を置く。

その際、2007 年来の研究から分かったのは、先行する訳注を見るかぎり、謝詩が丁寧に読まれてきたとは言いがたいことである。最古の注釈は『文選』李善注（7 世紀後半）なのだが、李善の示す典故が、その原文に遡り原文の前後の文脈まで含めて理解されているわけでは決してない。李善自身の文章も、かなり難解であるため、往々にして無視されたり閑却されたりしている。李善に遅れる五臣の注釈（8 世紀前半）は、平易であるためかしばしば援用されるが、しかしそれらは往々李善注とは齟齬があり、にもかかわらず、なぜ李善注ではなく五臣注を採用したのかについては、納得できる説明がほとんどなされていない。清代の学者たちの事実誤認や憶測もそのまま踏襲されている。新解が提示されても、その evidence は時に誤解に基づいている。

こうした先行研究の欠点を意識的に自覚し、まずは最古の注釈を、その原典にまで遡って理解する、という地味だが基本的な重要事を、読解の方法とした。

４．研究成果

上記２．の「目的」の①については、佐竹「「言志」「縁情」から「形似」へ」（中国言語文化研究 11、2022）と佐竹「Continuity and Discontinuity between Metaphysical Poetry and Landscape Poetry: The Pioneering Position of Chih Tun's Poems」（ACTA ASIATICA125The Emergence of Landscape Poetry、2023）、および齋藤 2021～2023 のほぼすべての論文が関わっており、さらに、まだ論文化されていない口頭発表では、佐竹「「遊石門詩序」と遊覧詩序の系譜と「遊天台山賦」」（京都大学中国文学会第 38 回例会、2023）と齋藤「高僧伝とは何か」（名取市増田公民館、2024）も関わりが深い。佐竹 2023 では、4 世紀までの玄言詩と 5 世紀の謝霊運山水詩との共通点と異質点を挙げ、異質点が、謝詩の「情」認識と詩篇末尾の反省的思惟にあることに着目し、前者の認識が、謝霊運と交がのあった慧遠・その高弟の宗炳・竺道生の文章中に見られること、さらにそれが、竺道生・仏馱跋陀羅・鳩摩羅什の漢訳仏典の中に頻見されること、を具体的に示した。加えて、上述の謝霊運山水詩が玄言詩に異なる 2 点は、玄言詩の中でも唯一、仏僧の支遁の詩には発見できること、支遁詩に山水描写は少なく傑出した佳句でもないが、しかし詩に内包される心情においては謝霊運詩に近く、パイオニアの一面を有していること、を示した。

上記２．の「目的」の②については、おもに佐竹「「言志」「縁情」から「形似」へ」（中国言語文化研究 11、2022）で検討した。儒学に基づく「詩言志」説とそこから派生した「詩縁情」説は日本にも波及し、『古今集』真名序や同仮名序の冒頭に記され、柿本人麻呂（660 頃-724 頃）らの和歌にも現れる。ただ「心を言葉にする」というのはもっとも素朴な詩歌観なので、どこであっても自然発生しうるが、しかしその素朴な自然発生的実感を、儒学経典や当時の中国の主流文学観のお墨付きによって、動かしがたいテーゼとして標榜した状況が考えられる。

他方、「情」は滅却あるいは浄化すべき対象で山水詠がその契機となるという認識は、決して自然発生的な素朴な実感ではない。日本には受け入れがたかったかもしれないが、しかし山部赤人（724-736 に活躍）の和歌には、その片鱗がうかがわれる。

ただ、柿本人麻呂から山部赤人までは、一世代 30 年も離れていない。中国では儒学的文学観の『毛詩』大序から謝霊運山水詩まで、400 年以上も経っている。この落差は、日本が当時もっぱら文化の受信地域であったことに起因しよう。発信地域では時代の異なる様々なスタイルが、受信地域には同時にまとめて入って来る。そのため新旧の文学思潮が共存し混在しえたと考えられる。

もっとも、本場の中国で、山水詠・自然詠が一首全体を覆うことはなかった。わずかに王維（699-759）の「鹿柴」や「辛夷塢」等の短篇にはそれが見られるが、しかし王維の詩群においても、それらは例外的存在でしかあり得なかった。繊細精緻で新鮮な自然詠は、たとえば杜甫（712-770）「曲江」其の二の頸聯にみごとに組み入れられているが、その尾聯はやはり「言志」「縁情」で結ばれている。

これに対し日本では、江戸時代の松尾芭蕉（1644-1694）や与謝蕪村（1716-1783）の俳句に、一首全体が叙景に徹した自然詠が生まれている。明治時代には正岡子規（1867-1902）の俳句や短歌にそれが見える。彼の「写生説」の根底には、5 世紀中国の新たな文学観も源流の一つとして流れ込んでいるのではないかと推察される。以上が、上記２.「目的」②について検討した研究成果である。

上記２.「目的」の③については、佐竹「謝朓「游東田」の新しさ」（集刊東洋学 125、2021）と佐竹「謝朓「郡に在り病に臥して沈尚書に呈す」について」（集刊東洋学 129、2023）が検討している。2021 年の前者は、謝朓「游東田」の山水詠が、句法・構成・措辞において、謝霊運を含めたどの山水詠とも異なる工夫を凝らすことで、詩句に明言することなく、強い緊張と不安を伝えていること、また末聯が、上句と下句の意味上の重みを等しくする修辞によって（この修辞は李善が指摘したが、五臣が異論を提出し、近代の訳注では前者が無視されもっぱら後者が採用されてきた）、謝霊運詩末聯のように悲哀や帰隠願望にストレートに収束するのではなく、その手前の微細な感情のゆらめきを表現していること、を示した。2023 年の後者は、謝朓「郡に在り

病に臥して沈尚書に呈す」の中の、従来解釈の異なっていたいくつかの詩語について、阮籍（210-263）・陸機（261-303）らの影響を見いだすことで、より整合性のある解釈を与え、詩中にひそむ不安の影を明らかにした。謝朓詩においても、謝霊運詩と同じく、山水詠の前後に非山水詠が置かれるが、しかしそれらは謝霊運詩のように叙情や説理を明言しようとするのではなく、いわくいいがたい微細な揺らめきを表現しようとするもので、その点が唐詩に近接している。また、明言しないにもかかわらず、謝霊運詩以上に強い不安の影を感じさせる。ただそれが、仏教思想や仏教哲学とどう関わるのかという点については突き詰めることができず、今後の課題として残された。

ほかに、現代中国人研究者の論文の訳注やその紹介、また5世紀末にまとめられた『宋書』所収の楽府詩の訳注をも公刊したが、それらは上記３．「研究の方法」に挙げた第二点目と関わっており、一次資料や最古の注釈を正確に丁寧に読解する姿勢を現代研究者から学び、古典文献においてそれらを実践したものである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計14件（うち査読付論文　11件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　9件）

１．著者名 佐竹保子	４．巻 125
２．論文標題 Continuity and Discontinuity between Metaphysical Poetry and Landscape Poetry: The Pioneering Position of Chih Tun's Poems.	５．発行年 2023年
３．雑誌名 ACTA ASIATICA (BULLETIN of THE INSTITUTE OF EASTERN CULTURE) The Emergence of Landscape Poetry.THE TOHO GAKKAI	６．最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐竹保子	４．巻 62
２．論文標題 王友琴1998－2004論文５篇の日本語訳（Japanese Translation of Wang Youqin's Research Papers from 1998 to 2004）	５．発行年 2024年
３．雑誌名 大東文化大学紀要〈人文科学〉	６．最初と最後の頁 153-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐竹保子（狩野雄・佐藤大志・釜谷武志・柳川順子・林香奈との共著）	４．巻 42
２．論文標題 『宋書』楽志二訳注稿（五）	５．発行年 2024年
３．雑誌名 未名（神戸大学文学会）	６．最初と最後の頁 24-40,100-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐竹保子	４．巻 129
２．論文標題 謝ﾁｮｳ（月ﾍﾝに兆）「郡に在り病に臥して沈尚書に呈す」について――陸機詩と阮籍詩を補助線として――	５．発行年 2023年
３．雑誌名 集刊東洋学	６．最初と最後の頁 61-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 齋藤智寛	4．巻 129
2．論文標題 天人口授の語るものー『律相感通伝』と道宣最晩年の華夷観念ー	5．発行年 2023年
3．雑誌名 集刊東洋学	6．最初と最後の頁 21-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 齋藤智寛	4．巻 9
2．論文標題 唐五代仏教における奇跡の唯識的解釈について－『続高僧伝』および『法苑珠林』の釈道英伝を中心に－	5．発行年 2024年
3．雑誌名 日本古写経研究所研究紀要	6．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 齋藤智寛	4．巻 0
2．論文標題 禅思想研究者から見た井筒俊彦の禅理解	5．発行年 2024年
3．雑誌名 科研最終報告書（基盤研究（B)20H01199）井筒俊彦の思想形成期における東洋思想とその学問的視座	6．最初と最後の頁 95-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐竹保子	4．巻 13
2．論文標題 翻訳書紹介　袁行霈著『陶淵明影像』	5．発行年 2022年
3．雑誌名 読画塾	6．最初と最後の頁 60-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐竹保子・林香奈・狩野雄・佐藤大志・釜谷武志・柳川順子	4．巻 40・41合併号
2．論文標題 『宋書』楽志二訳注稿（四）	5．発行年 2022年
3．雑誌名 未名	6．最初と最後の頁 96-110（全153頁）
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 齋藤智寛	4．巻 277
2．論文標題 北宋仏教の気風	5．発行年 2022年
3．雑誌名 アジア遊学	6．最初と最後の頁 213-218
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 齋藤智寛・柳原敏明・高橋章則・大木一夫・仁平政人・堀裕・鹿又喜隆・藤澤敦・西村直子・矢田尚子・長岡龍作・杉本欣久・阿部恒之	4．巻 10
2．論文標題 東北大学文学部百周年記念事業・デジタルミュージアム“歴史を映す名品”	5．発行年 2023年
3．雑誌名 東北大学附属図書館調査研究室年報	6．最初と最後の頁 133-135(全34頁)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐竹保子	4．巻 125
2．論文標題 謝チョウ（月篇に兆）「游東田」詩の新しさ――特に後三聯の修辞に注目して――	5．発行年 2021年
3．雑誌名 集刊東洋学	6．最初と最後の頁 41-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐竹保子	４．巻 11
２．論文標題 「言志」「縁情」から「形似」へ――中国５世紀における詩歌観の変質とその波及	５．発行年 2022年
３．雑誌名 中国言語文化学研究	６．最初と最後の頁 35-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 齋藤智寛	４．巻 125
２．論文標題 釈僧崖の傷害――菩薩行としての捨身行――	５．発行年 2021年
３．雑誌名 集刊東洋学	６．最初と最後の頁 59-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　6件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 佐竹保子
２．発表標題 「遊石門詩序」と、遊覧詩序の系譜と「遊天台山賦」
３．学会等名 京都大学中国文学会第38回例会（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 佐竹保子
２．発表標題 王友琴氏とその仕事の紹介
３．学会等名 2023年度外国語学部FD研究会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 齋藤智寛
２．発表標題 古勝亮『中国初期禅思想の形成』の刊行によせて ―第五章「薬山系禅師の自己認識とその背景」を中心に
３．学会等名 京都大学人文科学研究所共同研究「禅研究班」第8回研究会
４．発表年 2023年

１．発表者名 齋藤智寛
２．発表標題 武内義雄の「支那学」とその実際
３．学会等名 東北シナ学会4月例会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 齋藤智寛
２．発表標題 高僧伝とは何か
３．学会等名 名取市増田公民館講演会「名取新宮寺一切経『続高僧伝』と玄奘三蔵の伝記」
４．発表年 2024年

１．発表者名 佐竹保子
２．発表標題 玄言詩と山水詩における「哲理」と「情」
３．学会等名 第66回国際東方学者会議（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 佐竹保子
２．発表標題 中国の女性と文学――紀元前から12世紀まで――
３．学会等名 中京大学文学会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 佐竹保子
２．発表標題 名取本「玄奘伝」の字形についての一考察――「正字」、異体字、誤字――
３．学会等名 JSPS科研費第五回研究集会「日本における高僧伝の継承と展開」（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 齋藤智寛
２．発表標題 敦煌本『六祖壇経』整理の諸問題
３．学会等名 日本古写経研究所 令和四年度第二回公開研究会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 齋藤智寛
２．発表標題 『続高僧伝』雑科声徳篇の諸問題―釈真観伝とその周辺
３．学会等名 三浦秀一先生退休記念研究集会「中国古典学とその広がり」（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 佐竹保子
２．発表標題 「言志」「縁情」から「形似」へ
３．学会等名 大東文化大学大学院中国言語文化学専攻・外国語学部中国語学科共催第21回学術シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 佐竹保子
２．発表標題 五世紀における詩歌観の変質――その淵源とその波及
３．学会等名 六朝学術学会第43回例会
４．発表年 2022年

１．発表者名 齋藤智寛
２．発表標題 道宣の感通と「東夏」意識の変遷
３．学会等名 中唐文学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 齋藤智寛
２．発表標題 “眉鬚堕落”和“不惜眉毛”:从疾病形象看中古仏教思想的演変
３．学会等名 東亜漢文献与文化交流国際学術研討会（国際学会）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計2件

1．著者名 王友琴著、佐竹保子・土屋紀義・小林一美・多田狷介訳	4．発行年 2023年
2．出版社 集広舎	5．総ページ数 575
3．書名 血と涙の大地の記憶	

1．著者名 袁行霈作・佐竹保子訳	4．発行年 2022年
2．出版社 尚斯国際出版社	5．総ページ数 261
3．書名 陶淵明影像	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	齋藤　智寛 (SAITO tomohiro) (10400201)	東北大学・文学研究科・教授 (11301)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関